特集・『石清水物語』

緒　言

妹尾好信

平成十三年度の後期から、大学院生たちとともに『石清水物語』を輪読してきた。射和文庫蔵本を底本とし内閣文庫蔵一冊本で校合して作られた『鎌倉時代物語集成』第二巻（市古貞次・三角洋一編、平元　笠間書院）所収本をテキストにして読んできたのだが、本文上の疑問箇所が少なくなく、なるべく多くの伝本を見た上で本文批判をしたいということになった。そこで、国文学研究資料館所蔵のマイクロ資料を閲覧したり複写を取り寄せたりして諸伝本の本文を調査するとともに、伝本を所蔵する各地の図書館や文庫を手分けして訪問し、じかに伝本に接してその実体を確認することを行なってきた。書き入れの朱・墨の区別とか、料紙や表紙の材質や色・大きさなどは実見しなければわからない情報で、調査の成果は大きかった。テキストの底本にされた射和文庫本は、『鎌倉時代物語集成』には「外題・内題ともにナシ」と記されているが、実際には薄藍色の表紙左上に「正三位物語　上（下）」と打ち付け書で外題が墨書されていることが明らかになったのもひとつの収穫であった（国文学研究資料館のマイクロフィルムやその複写では、表紙全体が真っ黒に写って外題が見えない。紙焼き写真ではかろうじて判読できる）。

輪読は平成十四年度末で一応終了したが、伝本調査の方はまだ継続中で、将来的には校本の作成をめざしている。今回は、輪読の終了を機に、輪読と伝本調査に参加した院生たちにそれぞれの関心にしたがって『石清水物語』に関する論考を書いてもらった。そして、いまだ中間報告ではあるが、調査済みの伝本の書誌を紹介し、輪読の成果に基づいて物語の年立てと系図を整理して示すことにした。文字通り拙いものばかりだが、いわゆる中世王朝物語の中においても必ずしも基礎的研究が進んでいるとは言えない『石清水物語』に関して、ほんの少しでも今後の研究に役立つところがあればと思う。

『石清水物語』概観

妹尾好信

一　研究の現状

『石清水物語』は、いわゆる中世王朝物語の中では、比較的よくできた佳品に属する作品であろう。近世末までに版行されたことはなく、すべて写本で伝わっており、現在三十本近い伝本の存在が知られているが、必ずしも多くの読者を得た作品というわけではない。近代になって、明治四十年(一九〇七)に『続々群書類従』第十五輯に収められたのが活字刊行の最初である。その後、昭和二年(一九二七)に『日本文学大系』第五巻(国民図書株式会社刊)に収められて、簡略ながら頭注を施した注釈本が刊行された。同書は『落窪物語』『狭衣』『住吉物語』という平安朝の主要な物語三作品と併載する形で『石清水物語』が取り上げられており、画期的と言ってよい企画であった。擬古物語を代表しうる作品として、文章・構成ともにすぐれていることを評価しての採用であろう。ところが、注釈的研究はその後まるで進展せず、同書刊行以来七十六年を経た現在に至るまで、新たな注釈書はいまだ全く刊行されていないのである(『中世王朝物語全集』の一冊として刊行予定であるが、今のところ未刊)。

研究論文の方も多くはなく、明治期から細々と書かれてはいるものの古いものはほんの数編に過ぎず、ほとんどが昭和五十年代以降に発表されたものである。大槻修・神野藤昭夫氏編『中世王朝物語を学ぶ人のために』(平九　世界思想社)所収の参考文献一覧(吉海直人氏作成)によれば、平成九年三月時点でわずか十六編を数えるのみである。その後発表されたものを含めても二十編そこそこであろう。『石清水物語』の研究は、いまだ緒に就いたばかりと言わざるを得ないのである。

以下、いくつかの項目について、基礎的な事項を確認しつつ本物語を概観しておく。

二　書　名

多くの伝本に「石(岩)清水」「いはしみす」「石清水物語」などと題しているように、「石清水(物語)」が正式な書名と考えてよい。『風葉集』の作者名記載にも「いはし水の社(やしろ)の大将」(一六二)、「いはしみつの中関白」(一九五)、「いはしみつのいよのかみ」(四四六)とある。「石清水」という書名は、作中の伊予守が「八わた」(石清水八幡宮)に参籠した時に詠んで神の御前の柱に張り付けた歌「ふかくのみたのみをかくるいはし水ながくあふ瀬のしる(ヘイ)しともなれ」によっていることは明

らかである。本物語において、武士であり源氏出身と見なされる伊予守の八幡信仰と、八幡菩薩の霊験譚が基調にあることを思えば、「石清水物語」という書名は読者を納得させるものであろう。

ただし、これとは別に「正三位物語」と称する一群の伝本もある。それらは共通して、「正三位物かたり柴田常昭か本をかりてうつさせたる一かへりよみあはせたゝしつ／寛政六年八月十一日　本居宣長」という宣長の奥書を持っている。このことについて久下裕利氏は、「本居宣長が第二系統らしい柴田道昭(ママ)所持本を書写させた時あやまって『正三位物語』と記したようだ」と言われたが、これは宣長が誤ったわけではなく、柴田常昭(宣長門、寛政八年（一七九六）没)所持本に「正三位物語」とあったので、そのまま記したのだろう。もちろん宣長がこの「正三位物語」を『源氏物語』絵合巻で『伊勢物語』と合わされた『正三位』であると誤解したはずはない。別物と認識していたであろう。もし「正三位物語」という書名がある種の伝本に古くから付されていたものであるならば、錯誤からたまたま付けられた書名ではなく、何らかの由緒ある書名である可能性もあろう。しかしながら、「正三位」の語が物語の内容に由来するとは考え難い。ことによると、作者が正三位であり、「正三位」殿と呼ばれた公卿ないし高級女官またはその庇護下にあった人物であるというような理由があるのかも知れない。だが、伊勢が作者であるから『伊勢物語』の書名がついたとか、大和という女房が書いたから『大和物語』と名付けられたなどという伝承が歌物語にはあるが、作り物語においてはそのような書名の例は知らないから何とも言えない。もっとも、『石清水物語』の伝本には、高山市立郷土館本のように外題を「とりかへばや」と記すものや、筑波大学附属図書館蔵一本のように「松浦宮物語　ゑ　正三位物語」と記す（ただし、「松浦宮物語」は抹消されている）ものもあって、他の物語と紛れやすい傾向があるのも事実である。散逸した『正三位』がまだ世に存在した頃に紛れて付されたのだとすればそれはそれで興味深いが、『風葉集』に採られていない『正三位』が『石清水物語』の成立後まで存在していたと考えるのはかなり難しい。何にせよ、「正三位」という別称の由来は謎というしかない。

三　成立年代

本物語の成立年代については、早く平出鏗二郎氏が『近古小説解題』（明四二　大日本図書）において、成立の下限を『風葉集』撰進の文永八年（一二七一）とし、上限は、本文中に、「うせにしひたちのかみが子は、おさなくてかしまといひし、今はおとなびていよのかみと言。国くをめぐらして、さるべきつはものならひとして、三月づゝ京にのぼりて、大ばんといふ事をつとむる事、むかしより今にたえぬならひなりければ」（四一頁。引用は『鎌倉時代物語集成』第二巻による。以下同じ）云々とあるのに注目して、「大番役は鎌倉幕府以前は三年を以て交替することなりしに、頼朝改めて六月となす。後宝治元年更に三月に減せり。さればこの書も宝治元年以

後、文永八年以前、二十四年の間の作と見るべし」と言われたのが指標となっている。「むかしより今にたえぬならひ」という言い方からは、宝治元年(一二四七)をかなり下らなければならないようで、最大二十四年という期間はやや短い気がするけれども、いずれにせよ『風葉集』の成立以前の作であることは相違なく、一方、伊予守が「かしま」と呼ばれた少年時代に「かまくらといふ所に、わか宮とておはします、そこのべたうのたうとき人にておはしける」(一一頁)に預けられたという記事が見えることから、建久二年(一一九一)に焼失した鶴岡八幡宮を頼朝が造営・整備してから後を舞台としていると考えてよい。したがって『石清水物語』が鎌倉時代に書かれた物語であることは疑いなく、完全な形で残った数少ない「鎌倉時代物語」のひとつなのである。

四　作　者

本物語の作者は不明である。男か女かもわからない。尾上八郎氏が、「住吉物語などとは異なって、描写の筆の超凡なのを思わしめる。作者は全く不明であるが、当時では、秀抜な才人であったであろう」(『岩波日本文学大系』本「解題」)と言われ、久下裕利氏が、「平安時代の物語文学に造詣が深い作者と思われるが、不詳とするほかはない」(「石清水物語」『体系 物語文学史』第四巻〈平元 有精堂〉)と言われている域を出ない。あえて言えば、鎌倉政権に比較的近いところにいた教養ある男性公家ではないかと思う。

五　巻　数

本物語の伝本は、形態上、一冊本、二冊本、三冊本、四冊本の四種があり、巻数は定まらないが、中では二冊本の形態の本が最も多い。基本的に二巻二冊と言ってよさそうだが、久下裕利氏は、「現存諸本の多くが二冊本であっても、物語成立の過程では四分冊であった可能性が、本文形態に指摘できる」と言われた(前掲論文)。すなわち、二冊本の上冊は、「こ宮の御ことをつきせず思しなげきながらも、わかうさかりにおかしげなるたゞ今のみるめには、こよなくうつろひて、わすれ草のたねと成ぬるも、あはれなるよのならひ也けるとぞ」(七八頁)という一文で終わっており、いかにも巻の終わりにふさわしい文末表現である。ちなみに、下冊の末尾は、「かの山ふかくいりにし人も、ねんくつもりて、願ひのごとく、九品の上のしなにさだまる。おなじはちすの望も、むなしからざるべけんとぞ、ほんには侍るめるとかや」(一五三頁)とある。

ところが、同じ二冊本である京都大学本では、上巻の途中「くろき御そにやつれ給へるしもそ見るかひはなをまさりけるとぞ」(四一頁6行目にあたる)で切れて改行がなされている。また、下巻も、途中「さるはうきにましるこひ草もやありけんしらすや」(一二四頁14行目)で切れて一行空白が置かれている。これは「とぞ」「とかや」などとは異なる草子地表現だが、やはり巻末表現として不自然ではない形である。このことから久下氏は、「このような区切れは、紙

数分量による機械的な分割と考えられなくはないが、物語の内容上からも理解できる点、成立時での四巻形式の可能性がありえよう」と言われるのである。

その可能性は否定できないが、たとえば、四冊本の岡山大学蔵池田家文庫本と高山市立郷土館本は、第一冊の末尾は京大本上巻途中の切れ目に等しいものの、第三冊の末尾は「けふりたつおもひをいとゝたきましてなけきをそふるあふ坂の山」（一一二頁15行目）という歌であり、これに続く伊予守の言葉から第四冊が始まる形になっている。同じく四冊本の内閣文庫本では、第一冊の終わりは先の上巻途中の切れ目にほぼ一致するが、「くろき御そにやつれ給るしもそみるかひ猶まさりける」で終わり、第二冊の冒頭が「こそうせにしひたちのかみか子の」で始まっている。また、第三冊末尾は「なへて世もおそろしう人の御ためもひとかたならすなけき入てしつみすくしてそありける」（一一七頁14行目）とあって、京大本の区切れとも池田家文庫本の区切れとも異なる箇所で切れている。さらに、筑波大学蔵一本は本来四冊であった本を合冊して二冊にしたものであるが、もとの第一冊の末尾は京大本に一致するものの、もとの第三冊の末尾は「うつし心もなきさまなから、大納言とのへとことよせていよも御おくりにまゐりぬ」（一一四頁5行目）である。このように、四冊本と言っても必ずしも区切れの箇所は一定していないのであり、二冊本の場合、上巻はともかく下巻は便宜的に二分割されたものと考えざるをえないのである。なお、諸伝本のうち天理図書館蔵本だけが三冊本で特異な巻構成になっているが、上巻末が「こはたのさとへも常におとつれ給てたいめんもこゝろもとなきをかゝるなけきのほとにとゝこほりぬる此程過してと聞え給へり」（四七頁1行目）であり、中巻末は「こゝろの内のいさきよきならは又なき御たのもし人ならまし」（九七頁3行目）であるという独自の切れ目になっている。他の諸本が共通して巻の区切れとしている二冊本の区切れの箇所は全く切れ目なく続けて書写されているのである。

そうではあるけれども、「とぞ」や「とかや」で終わる文が巻の切れ目にふさわしいことは事実である。ちなみに、四冊本『とりかへばや』の巻末表現を見ると、

○巻一「さはれ、かくと世をかりそめに思ひなすには憂きも憂からず、となむ」

○巻二「同じ心なりけるも過ぐしがたくて、立ち寄りたまひぬとぞ」

○巻三「いとどしき嘆きぞまさることわりを思ふに尽きぬ宇治の川舟」（和歌）

○巻四「憂くもつらくも恋しくも、一方ならずかなしとや」

と、和歌で終わる巻三を除いて、どれも巻末らしい表現である。

同じ四冊本である『若の衣』ではもっとはっきりしていて、

○第一冊（春）「しばし候ひて立ち給ふ用意など、いかでかくしもよろづにすぐれ給ひけんと、尽きせず見送り給ひけるとぞ」

○第二冊（夏）「はかなきことにつけても、ただ限りなくのみ聞こ

え給ふとぞ」

○第三冊(秋)「消え給ひにけん御行方も問ひ奉らんと人知れず思されけるとぞ」

○第四冊(冬)「殿・中宮などは堰きかね給へる御気色、理なりとぞ」

と、すべて「とぞ」で終わっている。京大本『石清水物語』の切れ目を本来の四巻本の巻末表現だとするとこれらに近い形になっていると言える(蓬左文庫本も下巻の途中、京大本と同じ箇所で改行されている。上巻の途中には改行はない)。

二冊本は本来四冊本であったものを合冊して二冊にしたものがもとになっていると見てよさそうだが、下巻については、再び四冊に分冊された際、上巻ほど明確な巻末表現ではないために何種類かの異なる分割法が生じたということなのではないであろうか。

六　内　容

『石清水物語』は、

この頃の左大臣ときこゆるは、関白殿の御おとうとにこそおはすれ。御身のざえなどもかしこく、何ごとも、あにの殿にはたちまさり給へれば、みかどもいみじくおもきものに思ひ聞え給へり。(五頁)

と、何事にもすぐれた左大臣の紹介から始まる。この人の北の方は先帝の四の宮だが、ひどく嫉妬深い女性で、左大臣が愛情をかけた宰相の君という女性が懐妊すると、激しいいやがらせをしたので、宰相の君は身を隠し、常陸守の妻になっている姉を頼って懐妊のまま常陸に下向する。

左大臣には四の宮腹に二人の男子があった。兄は二位の中将で、歳の離れた弟は元服して侍従となる。女子のないことをさびしく思っていた左大臣は唐土から来た相人に占わせたところ、

御子三人おはしますべし。おとこ二人、いづれもめでたくて、おほやけの御うしろみとなり給べし。女は、をとりばらにていでものし給べきが、上なきくらゐにおよび給なん(六頁)

と告げられる。これによって、左大臣は宰相の君に女児が生まれることを確信し、その行く末を知りたく思うのであった。

こうして冒頭から、この物語は左大臣の劣り腹の姫君が苦難の末に后にまで昇りつめる話であることを読者に予告する。左大臣と宰相の君に『源氏物語』の頭中将と夕顔、常陸で生まれる姫君に玉鬘の面影があることは夙に指摘されていることだが、結局鬚黒の妻におさまって家庭婦人として生きた玉鬘とは違って、この物語はヒロインが女性として最高の地位にまで昇るサクセス・ストーリーとして構想されているのである。

以後、物語は、都と常陸のありさまを交互に描く。常陸では、宰相の君が予言通り「光るやう成女」を生むが、長い間の心労がたたったのか亡くなってしまい、女児は常陸守の妻の手で育てられる。常陸守には外腹に男児が一人おり、「かしまの君」と呼ばれたが、鎌倉

の若宮の別当に預けられた。

都では、関白の三男春の少将と、左大臣の次男秋の侍従とが当代を代表する貴公子として並び称されていた。このあたりは、あたかも「宇治十帖」における薫と匂宮のごとき二人主人公の物語の様相を呈し、しのぎをけずる二人の風流人の活躍を読者は期待するのだが、実際にはその後、春の君の出番はほとんどなく、もっぱら秋の君が男主人公としての地位を固めていくように見える。読者は少し肩透かしをくわされた恰好になる。

秋の君は、ある年の三月初旬、三室からの帰途に木幡でふと立ち寄った家に五十歳ばかりの尼と十七、八歳の娘を見出し、娘の美しさに魅了される。尼君は実は常陸守の妻で、守が病の末に亡くなったので成長した姫君を連れて木幡に移り住んでいたのだった。姫君に心惹かれた秋の君は寝所に忍び入るが、すんでのところで姫君が腹違いの妹であることを知らされる。ここで読者は『伊勢物語』や『宇津保物語』の先蹤に引かれて兄と妹の道ならぬ恋の物語に展開することを予想するが、秋の君は姫君に心惹かれつつも、それ以上の行動に出ることはない。また読者は予想を裏切られるわけである。

そこに現われたのがかつての「かしまの君」で、今は故常陸守の後継となり伊予守と名乗っていた。大番を勤めるため上京した伊予守は養母である木幡の尼君のもとに滞在しており、そこで美しく成長した姫君を垣間見て恋の虜となる。四冊本の第二冊に入って物語は新たな男君を登場させるのである。実はこの東国育ちの青年武士伊予守がこの物語の真の男主人公なのであった。ここに至って読者は予想外の展開に驚きととまどいを感じるはずである。

真の主人公をなかなか登場させないのは、中世王朝物語の手法のひとつである。たとえば、『海人の刈藻』が、権大納言と按察使大納言の大君との結婚、院の大将の按察使の中君への密通そして結婚という二組の恋物語を長々と描いた末に、院の新中納言と入内して女御になった按察使の三の君との恋愛を語りはじめるというような例がある。これはやや長編の物語には有効な技法と言ってよかろう。ここで物語は、伊予守と秋の君との男色めいた関係なども織り込みながら、いわゆる「しのびね型」の悲恋物語へと進んでいくのである。

伊予守は尼君の留守中に姫君のもとへ忍び入る。その後、姫君が実父の関白邸に引き取られたため逢うことができず、さらに東国に乱が起こって伊予守はその平定のため下向する。そして命を賭した戦いに勝利して伊予守が都に凱旋すると、姫君の入内が決まっていた。伊予守は意気消沈するが、尼君の病気見舞いのため姫君が木幡を訪れた際に二度目の逢瀬を持ち、入内が延期されるうちに、弁の君の手引きで三度目の逢瀬を果たす。一度の逢瀬で女君が懐妊するという設定の物語が多い中で、この物語では伊予守と姫君は都合四度の逢瀬を繰り返すが、姫君の懐妊という事態には至らない。最初の逢瀬では恐れおののいて泣くばかりだった姫君が、三度目の逢瀬では伊予守の懇願に応えて返歌をするまでになった。

さて、ここで物語はまた意外な展開を見せる。九月末ごろ、関白

の夢に、八幡大菩薩の使いと名乗る老翁が出てきて、姫君の入内準備のために整えた衣装の袂に、

「あだ人の重ねし夜半の衣手を雲井にいかゞおもひたつべきなめげにやあらん」（一一五頁）

と書きつけたのである。「あだ人」が姫君と袖を重ねたのにどうして入内などを考えてよかろうか、無礼ではないかというので、これによって関白は姫君の入内中止を決断する。処女でない娘を帝に奉るのは失礼だという夢告に応えたわけだが、関白は老翁の言う「あだ人」とは息子の秋の大納言ではないかと思い込み、これが事実であったらとても知らぬふりで入内を強行することはできぬと判断したのである。たとえ帝であっても並みの容貌の人には添わせたくないと思うほど美しい姫君の処遇に悩んだ関白であったが、熟慮の末、入内中止と聞いて我も我もと名のりをあげる君達の中で、年老いた中務宮と結婚させることを決意する。この宮は、「御歳などはたけたれど、御心もちいもをろかならず、ざえかしこきゝこへをはするが、とし頃のうへ、物えむじをいたくし給けるを、こらしきこへむとて、しばしはなれ給けるほどに、いちはやき心にて、わざとなく成給ひにける」（一一八～一一九頁）といういわく付きの人物であった。嫉妬深い妻をこらしめようとしばらく離れていたところ、妻はあてつけに自殺してしまったというのである。実際、姫君と結婚後も中務宮は物の怪となった妻の死霊に悩まされ、時折、四、五日間も我を失ってしまうことがあったのだが、物の怪は次第に激しくなり、姫君がそばに寄ると様子が変わって物の怪が脅迫めいた言葉を発するようになる。姫君は逃げるように関白邸に戻る。

伊予守は姫君が中務宮と結婚して以来意気消沈していたが、関白邸に戻ってくると、侍女の弁の君の手引きで密会する。これが四度目の逢瀬である。中務宮に嫌悪感を強めていた姫君は、これまでとは違って、伊予守に対して「あはれになつかしげなる御もてなし」を見せ、伊予守は「心玉しゐまどひはてぬべき」ありさまとなる（一三五頁）。この時姫君は、別れ際に自分の方から歌を詠みかけた。喜びに浸る伊予守だが、かえってこれが出家の意志を強めることになる。伊予守は、「さばかりあたらしき御身の、うきみひとつゆへに女御かういともいはせきこえぬだに、ゆゝしきあやまちをかしなるを、すへのよまでのうき名を伝えきこえんことは、いかゞあらん」（一三七頁）と思う。自分のせいで女御・更衣ともなるべき姫君の幸せを奪ってしまったという罪の意識が伊予守を出家に駆り立てたのである。こうして物語は急速に「しのびね型」の出家遁世譚に向かっていくのであるが、「しのびね型」は、男主人公の出家と引き替えに女主人公が栄達していくという展開であるのに対し、この姫君の現状はいかにも悲惨である。読者は、このまま伊予守が出家しても姫君は全く救われない、どうせならためらわずに姫君を奪って逃げるべきではないかと伊予守の出家への傾きに批判的になるだろう。しかし読者はまた一方で、物語の始発にあった「上なきくらゐにおよび給なん」という相人の予言を知っているから、このまま姫君が悲

惨な境遇のままで終わるはずがない、必ずや姫君は今の境遇から救い出されるに違いないと期待しつつ先を読み続けることになる。そして作者は、そんな読者の期待に応えるべく、姫君の身の上にドラマティックな展開をしかけて見せるのである。

十月になった。かつて一旦延期された姫君の入内が予定されていた月である。五日の宵、中務宮邸から人が来て、宮が危篤で、もう一度姫君に会いたがっているので車で迎えに来たと言う。姫君は侍女の大納言の君だけを供にして大急ぎで出発する。ところが、姫君を乗せた車は、宮邸ではなく、あらぬところへと向かったのであった。姫君の後を追って宮邸に行った従者たちが、姫君が着いていないことと宮が気分よく眠っているのを知って、姫君が何者かにだまされて拉致されたことが判明したのである。

姫君が行方不明になって途方にくれている関白邸に、内裏から中将の内侍がやってきて関白と対面し、姫君を連れ去ったのは帝であって、姫君は今は藤壺に置かれて、帝は夜も昼も付きっきりである由を告げる。あまりのことに関白は「目も口も大に成心ちして」（一三九頁）あきれ返るのであった。

この後、十月十五日に中務宮は死去。姫君は晴れて藤壺の女御と呼ばれるようになる。伊予守は意外な展開に驚きながらも、「もとよりかやうにこそものし給べかりし御身の、ひきたがへられにし御さまは、あかず口をしかりしに、思ふほいたがはずなりぬるはうれしけれど、いとゞ雲ゐにきゝなし聞えつるは、すゝむる山みちのしるべにや」（一四一～一四二頁）と述懐、姫君に開けた幸福への道を喜びつつ出家の意を固める。そしてその後、伊予守は秋の大将にそれとなく別れを告げ、疎遠だった北の方のもとに泊まって、翌朝、身の回りを整理して息子たちに遺訓を残し、暁に乳母子の衛門尉を伴って歴戦の名馬「おにぐろ」にまたがって家を出るのである。

伊予守は高雄山（神護寺であろう）で出家を遂げ、一方、姫君は帝の第一皇子を産んで「さういなきさいの宮」と言われるようになる。父関白は、改めて「ものしりのかんがへ申したること」を思い合わせたという。こうして、物語は典型的な「しのびね型」の話型に終結する。伊予守の出家前後の記事にとりわけ『海人の刈藻』の影響が強いことはすでに指摘されている通りである。ただし、姫君の幸福が、帝による拉致という荒っぽい実力行使であるところが、他の物語にはないこの物語独自の設定である。

帝が早くから姫君の入内を心待ちにしていたことは、入内中止の報を知った時の記事に、

内には、かたちめで度よしきゝおかせ給て、延にしをだに「こゝろもとなし」とおほせられけるに、俄にかゝることのきこへ有て、中将のないしして、ことのよし忍びてそうし給へば、ほゐなく口惜と、おぼしなげかせ給ふ事かぎりなし。（一一八頁）

とあることによって知られる。そして、姫君が中務宮の妻となった後も、中将の内侍が姫君の美貌を「目もおよばずめできこえ」て、「よの末と言へど、めづらか成人も出物し給ひけるよ。かぎりなし

といへど、猶ことの葉たらずこそ」（一二六頁）などと奏上していたものだから、帝は、「ひきたがへられて、くちおしき事にのみおぼされければ、事の折節にはなをおぼし絶えず、いかでみんの御心もたへざるべし」（同）と、依然姫君への関心と執着を失っていないことを記している。これらの記事が伏線となって帝の姫君略奪作戦へと繋がっているのである。作者の非凡な物語創作能力が感じられるところである。

しかしながら、どうしてもひっかかる点がある。それは、入内中止を決断した関白が、姫君をよりによって年老いた中務宮と結婚させたことである。本文中には、「としのほどこそ打合ぬ心ちして、ならべぐるしけれど、人ぎゝはあなづらはしからず、おもくしても、御かどにつぎゝこえては、この宮などこそ世にもちひられ給へれば、年たけ給へりとも、おやざまにゆづりきこえてんも、中〳〵心安かりなん」（一一九頁）と、決断に至るまでの関白の心理が描かれているし、女主人公が老人と結婚するという設定が『夜の寝覚』（中間欠巻部分）において寝覚の上が老関白に嫁いだことを模倣したものであることは久下裕利氏が指摘された（前掲論文）ところであるが、それにしても、「おなじ御かどゝきこゆとも、すこし御かたちなどをくれたらんもさしならべては、あかずこそ心のやみにはおもひぬべき人のさまなるを」（一一六頁）とまで思う姫君の結婚相手に選ぶには、あまりにも難が多過ぎよう。なぜ関白はあえて姫君を中務宮と結婚させたのであろうか。

そこで気になるのは、関白は、入内中止を決定した時点でも、なお姫君が「上なきくらるにおよび給なん」と言った唐土の相人の予言を信じていたに相違ないことである。この予言は関白自身が相人に依頼して得たものである。つまり、入内が中止になっても、いずれ姫君は帝に見出されて将来は后の位にも昇るはずだと予想した上で決断したのが老中務宮に嫁がせることだったのだ。「年たけ給へり」とか「ねびさらばひたる」とか「おひしらひておはする」とかことさらに老齢が強調されているように、近い将来死去することが予想されるから姫君と結婚させたのであろう。老人の死去後、姫君に開ける新人生を念頭に置いての選択と考えないわけにはいかないと思うのである。姫君を結婚させることは、姫君が非処女であることを覆い隠し、息子の秋の大納言との密通（関白はそう思いこんでいる）事件を隠蔽するためにどうしても必要であったが、あくまでそれは一時避難に過ぎないからである。

関白は、夢の告げを得て姫君の処遇について煩悶する中で、次のように考えている。

かゝる夢のつげなからましかば、しらずして参らせたらんは、いかにびんなきことにおぼされまし。そのかぎりなくむかひく御らんじ出て、みなれさせ給に、御志ふかくおぼさるゝに、我とさいはい出る人くは、いか成あやしの者のふるめなりとも、さるかたにてとがなきこと也。おやたちそひ世にひゞき、女御きさきだちなどのゝしりてまいらせたらん人の、人にみへ

たらん程のおやのはぢ、おそれふかきことやはあるべき（一一五頁）

やや難解な文だが、要するに、正式の手続きを踏んで鳴り物入りで入内した娘の過去が後で露見したときの親の恥や畏れは大変なものだが、そうではなくて、帝が自ら見出して思いをかけ寵愛を受けた場合は、どんな卑しい者の古女房であってもその女の咎にはならないものだと言っているのである。つまり、入内は中止しても、帝が自分から姫君に目をかけて愛してくれるならば、誰と結婚していても問題ないというわけで、そうならば、むしろ不釣り合いな老人であるほうが都合がよいのだ。唐土の相人の予言を信じる関白にはそういう計算があったに違いない。

こう考えると、帝による姫君拉致事件も、すべて関白がしくんだことではないかとさえ思えてくる。中務宮の病気が重くなった頃合を見計らって、帝と心を合わせて姫君の略奪を実行させる。これは関白邸に出入りしていた中将の内侍を抱きこんで計画すれば容易なことである。むろん、姫君が中務邸へ向かったまま行方不明となったのを知った時「あきれまどひ給ふ事かぎりな」かったのも、中将の内侍から事の次第を聞いて「目も口も大に成心ちし」たのも、すべて世間を欺くための芝居だったことになる。

帝が人妻を我がものにして寵愛し、女御にした例として、例えば、『恋路ゆかしき大将』巻一に語られる、源氏太政大臣（戸無瀬入道）の妻「玉光る」の場合がある。太政大臣は右大臣の娘を正妻として仲睦まじく暮らしていたが、入内が予定されていた式部卿宮の娘「玉光る」を盗み出して寵愛し、二人の男子が生まれた。もとの妻は嘆きながら死去、それを悲しんだ太政大臣は出家を決意。二人の子と妻の行く末を案じた太政大臣は、宮中に参って帝と相談することがあった。すると、夫の出家後も付き従うつもりでいた妻は、そのまま宮中に留められて帝の寵愛を受け、藤壺の女御と呼ばれるようになった。こうして太政大臣は安心して出家し、戸無瀬に移ったというのである。この話は、入内予定であった女性を略奪して妻とした太政大臣が、出家に際してその妻を帝に譲ったというものであり、入内予定の姫君が老中務宮の妻になり、それを帝が略奪して自分のものにするという『石清水物語』の場合とはいささか異なるが、どちらも人妻であった女性が帝に寵愛されて「藤壺女御」と称したという点で共通する。少なくとも、物語の世界では、帝が寵愛し、女性の庇護者が納得すれば、正式に入内しなくても女御にも后にもなりうるということである。『石清水物語』の関白は、姫君が后の位にもつくという相人の予言を信じて、息子との密通を隠蔽するために中務宮と結婚させ、早い時期に帝が姫君を奪い取る機会が来ることを願ったのである。そんなふうに読んでみると、この物語はいっそう面白くなるように思うのである。

以上、物語のあらすじを紹介しながら、作者がしかけたさまざまな工夫を読み取ってみた。

――せのお・よしのぶ、広島大学大学院文学研究科助教授――